概　　要

1　調査の目的

この調査は、児童、生徒及び幼児(以下「児童等」という。)の発育及び健康状態を明らかにすることを目的としている。

2　調査事項

児童等の発育状態：身長、体重及び座高

児童等の健康状態：栄養状態、せき柱・胸郭の疾病・異常の有無、視力、聴力、眼の疾病・異常の有無、耳鼻咽頭疾患・皮膚疾患の有無、歯・口腔の疾病・異常の有無、結核の有無、心臓の疾病・異常の有無、尿、寄生虫卵の有無、その他の疾病・異常の有無及び結核に関する検診の結果

3　調査の範囲

小学校、中学校、高等学校及び幼稚園のうち、文部科学大臣があらかじめ指定する学校(以下「調査実施校」という。)

4　調査客体

（1）小学校・中学校

調査実施校に指定された学校の児童・生徒の一部

（2）高等学校

調査実施校に指定された学校の生徒の一部

ただし、次に掲げる生徒は調査対象者から除く

（ア）全日制課程及び定時制課程に在籍する満１８歳以上の生徒

（イ）通信制課程の生徒

（3）幼稚園

調査実施校に指定された幼稚園の５歳児の一部

5　調査の規模

区　分	学校総数	調査実施校数	児童等総数(A)	発育状態調査対象者数（B)	抽出率 B/A(%)	健康状態調査対象者数（C)	抽出率 C/A(%)
幼 稚 園	５１５	３５	６５,６９０	1,５２４	2.3	1,９７２	3.0
小 学 校	７８３	６０	２８７,７７５	5,７６０	2.0	１１,９２２	4.1
中 学 校	３８０	４０	１４６,９６１	4,６８０	3.2	8,８１９	6.0
高等学校	１８１	６０	１４５,２０３	2,６８３	1.8	4,３８２	3.0

＊ 学校総数及び児童等総数は、平成１７年度学校基本調査報告書(文部科学省)による。

6　調査の期日

平成１７年４月１日から６月３０日までの間に実施された学校保健法による健康診断の結果に基づき調査

7　集計結果

発育状態：文部科学省が集計したもの

健康状態：承認を得て、福岡県が独自に集計したもの

〔利用上の注意〕

（1）本調査の調査客体数は全国集計で精度を満たす抽出数となっているが、福岡県分のみの集計結果では各年度でかなりの開き(特に健康状態調査)が見られる場合があるため、県分の長期間の傾向を見るための資料にとどめる等、精度面の問題点に留意のうえ活用されたい。

（2）年齢は、平成１７年４月１日現在の満年齢である。

（3）この結果数値は速報であるため、後日文部科学省から公表　P　ﾈﾏiUﾀ結果数値

1　発育状態調査結果

(1)　身 長

①　前年度との比較

前年度との比較は表１のとおりである。

身長を前年度の同年齢と比較すると、男子では、最も増加しているのは、１１歳の１.３㎝で、最も減少しているのは、１６歳の０.５㎝である。

女子では、最も増加しているのは、１３歳の ０.５㎝で、最も減少しているのは、６歳及び８歳の０.５㎝である。

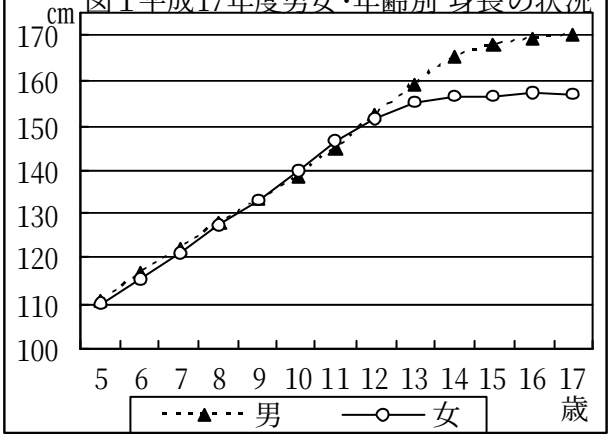
表1 男女・世代・年齢別 身長の状況　(単位:㎝)

区　分		男子 平成17年度 A	男子 平成16年度	男子 昭和50年度 B(親の世代)	男子 差 A−B	女子 平成17年度 A	女子 平成16年度	女子 昭和50年度 B(親の世代)	女子 差 A−B
幼稚園	5 歳	110.4	110.6	109.7	0.7	109.7	110.0	109.0	0.7
小学校	6 歳	116.6	116.2	114.8	1.8	115.1	115.6	114.1	1.0
	7	122.0	122.1	120.1	1.9	121.2	121.6	119.8	1.4
	8	127.7	127.6	125.7	2.0	127.2	127.7	125.3	1.9
	9	133.1	132.7	131.4	1.7	133.3	133.3	131.1	2.2
	10	138.5	138.4	136.1	2.4	139.9	139.6	137.6	2.3
	11	145.0	143.7	141.6	3.4	146.5	146.5	143.7	2.8
中学校	12 歳	152.4	152.4	148.1	4.3	151.8	151.8	149.2	2.6
	13	159.5	159.1	155.4	4.1	155.1	154.6	153.0	2.1
	14	164.9	164.4	162.0	2.9	156.6	156.5	154.9	1.7
高等学校	15 歳	167.7	167.9	165.7	2.0	156.8	157.0	155.8	1.0
	16	169.0	169.5	167.9	1.1	157.5	157.2	155.9	1.6
	17	169.9	170.3	168.9	1.0	157.1	157.0	156.3	0.8

②　男女の比較

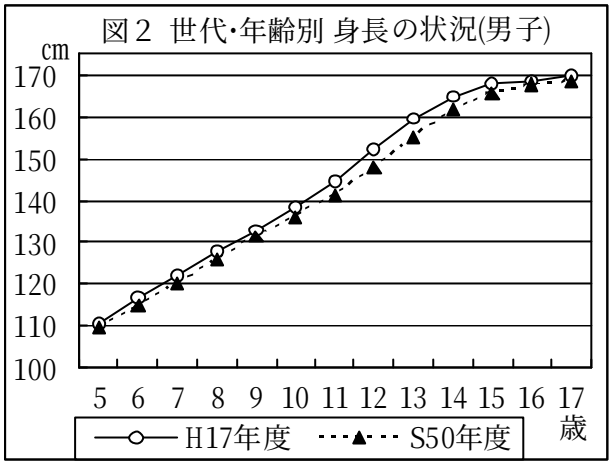
年齢別に男女を比較すると、表１･図１のように９歳から１１歳では女子の身長が男子をやや上回っている。また、１２歳まではほとんど男女差はないが、１３歳以降は男子が女子を大きく上回るようになり、差が最大となる１７歳では男子の方が１２.８㎝高くなっている。

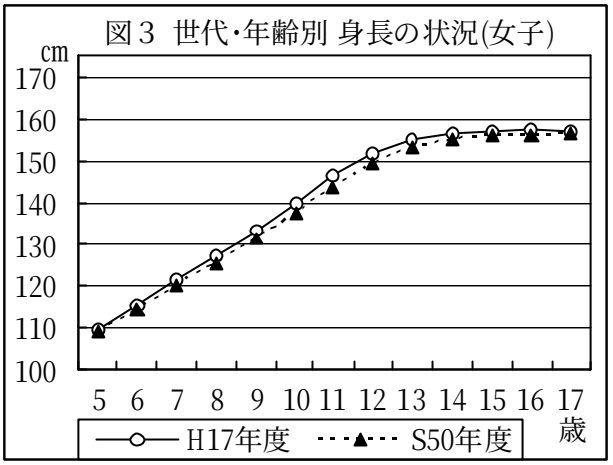
図１平成17年度男女･年齢別 身長の状況



〈親の世代との比較〉

親の世代(３０年前の昭和５０年度の数値。以下同じ。)と比べると、表１･図２･図３のように、男女ともすべての年齢区分で親の世代を上回っている。男子では１２歳で４.３㎝と差が最大となり、１５歳で親の世代の１６歳にほぼ相当し、１６歳では親の世代の１７歳を上回っている。女子では１１歳で２.８㎝と差が最大となり、１４歳で親の世代の１７歳の身長よりも高くなっている。





③ 年間発育量[1]

１７歳(昭和６２年度生まれ)の各年齢における年間発育量をみると、男子では図４のように１１歳及び１２歳時の発育が著しく、１２歳時に最大の発育量(７.５㎝)となっている。

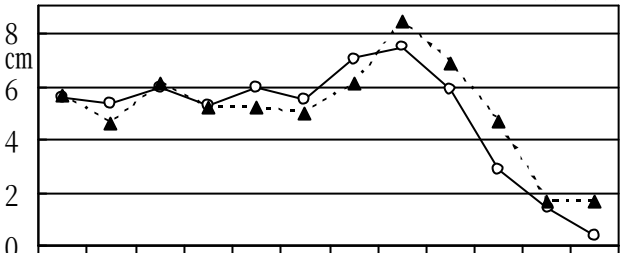
女子では図５のように、７歳から１０歳時の発育が著しく、９歳時に最大の発育量(６.９㎝)となり、最大の発育量となった年齢は、男子に比べ３歳早く、前年度と同じ年齢である。

〈親の世代との比較〉

親の世代(昭和３２年度生まれ)と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は、親の世代と同じ１２歳時となっており、８歳から１１歳時で親の世代を上回っている。

女子では発育量が最大となる時期は親の世代よりも１歳早い９歳時となっており、６歳から９歳時で親の世代を上回っている。

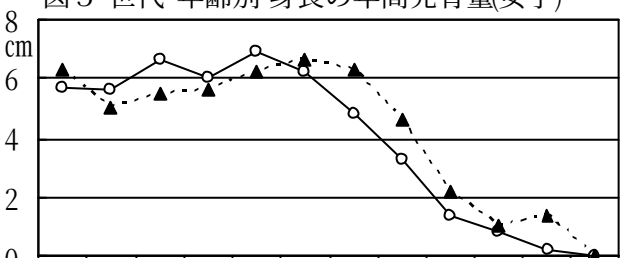
図４ 世代･年齢別 身長の年間発育量(男子)



	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
S62年度生	5.6	5.4	6.0	5.3	6.0	5.5	7.0	7.5	5.9	2.9	1.4	0.4
S32年度生	5.7	4.6	6.1	5.2	5.2	5.0	6.1	8.4	6.9	4.7	1.7	1.7

S62年度生　S32年度生

図５ 世代･年齢別 身長の年間発育量(女子)



	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
S62年度生	5.7	5.6	6.6	6.0	6.9	6.2	4.8	3.3	1.4	0.8	0.2	0.0
S32年度生	6.3	5.0	5.5	5.6	6.2	6.6	6.3	4.6	2.2	1.0	1.4	0.0

S62年度生　S32年度生

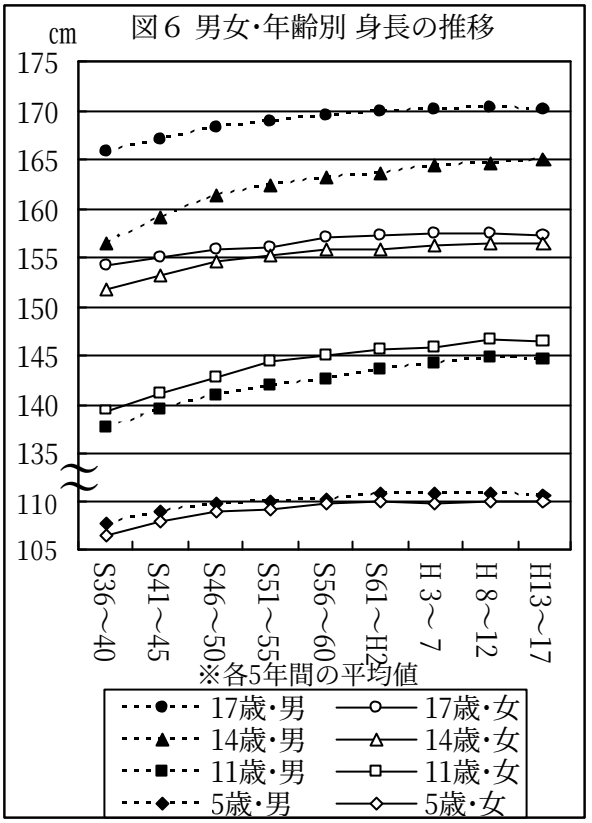
[1] 年間発育量とは、例えば、身長では、昭和62年度生まれの「5歳時」の年間発育量は、平成6年度調査6歳の者の身長から平成5年度調査5歳の者の身長を引いたものである。以下、体重において同じ。

④ 過去４５年間の推移

身長の推移を、５歳(幼稚園)、１１歳(小学校)、１４歳(中学校)、１７歳(高等学校)の４つの年齢について男女別にみると、図６のとおりである。
(注:５年間の平均値を使用。)

全体の傾向をみると、昭和５６～６０年度を境にして、伸びの傾斜が緩やかになっている。

最近の動きに注視すると、１４歳男子を除き、各年齢で前年度区分を下回っている。



(2) 体 重

① 前年度との比較

前年度との比較は表２のとおりである。

体重を前年度の同年齢と比較すると、男子では、最も増加しているのは、１１歳の１.２kgで、最も減少しているのは１６歳の０.７kgである。

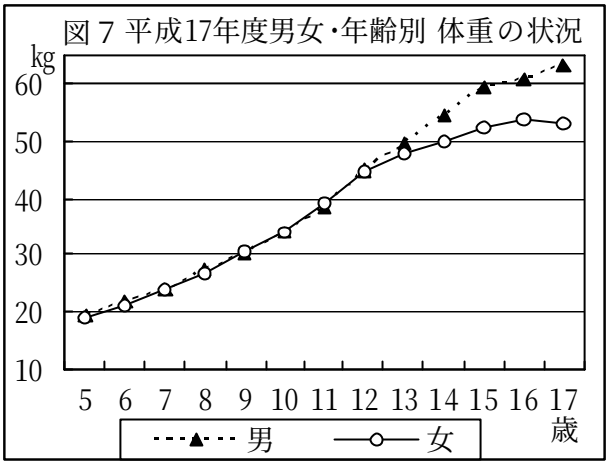
女子では、最も増加しているのは、１６歳の１.０kgで、最も減少しているのは、６歳、８歳及び１０歳の０.２kgである。

表2 男女･世代･年齢別 体重の状況 (単位:kg)

区分		男子 平成17年度 A	男子 平成16年度	男子 昭和50年度 B(親の世代)	男子 差 A−B	女子 平成17年度 A	女子 平成16年度	女子 昭和50年度 B(親の世代)	女子 差 A−B
幼稚園	5 歳	19.1	18.9	18.5	0.6	18.8	18.7	18.2	0.6
小学校	6 歳	21.6	21.1	20.2	1.4	20.8	21.0	19.7	1.1
	7	23.7	24.1	22.3	1.4	23.7	23.6	22.1	1.6
	8	27.2	27.2	25.1	2.1	26.7	26.9	24.7	2.0
	9	30.1	30.2	28.1	2.0	30.6	30.0	27.8	2.8
	10	33.9	34.1	31.0	2.9	34.1	34.3	31.6	2.5
	11	38.7	37.5	34.5	4.2	39.2	39.2	35.9	3.3
中学校	12 歳	44.8	44.2	39.3	5.5	44.5	44.3	40.9	3.6
	13	49.4	49.4	44.7	4.7	47.8	47.5	45.2	2.6
	14	54.5	53.6	50.4	4.1	49.9	50.0	48.5	1.4
高等学校	15 歳	59.5	59.5	55.0	4.5	52.2	52.0	49.8	2.4
	16	60.6	61.3	57.3	3.3	53.7	52.7	50.7	3.0
	17	63.2	62.7	59.0	4.2	53.0	52.6	51.1	1.9

② 男女の比較

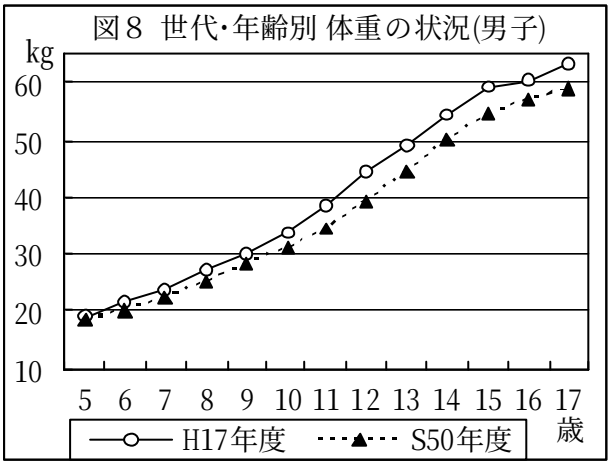
年齢別に男女を比較すると、表２・図７のように、９歳から１１歳で女子の体重が男子をやや上回っている。また、１３歳まではほとんど男女差はないが、１４歳以降は男子が女子を大きく上回るようになり、差が最大となる１７歳では男子の方が１０.２kg重くなっている。

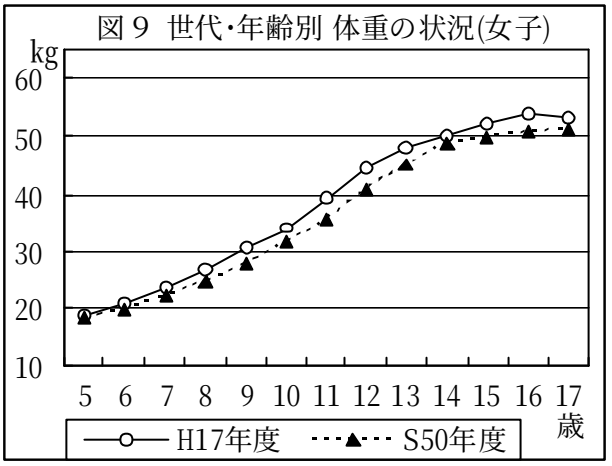


〈親の世代との比較〉

親の世代と比べると、表２・図８・図９のように、身長の場合と同様に、男女ともすべての年齢区分で親の世代を上回っている。

男子では１２歳で５.５kgと差が最大となり、１５歳以降では、それぞれ親の世代の１歳上の体重を上回っている。女子では１２歳で３.６kgと差が最大となり、１４歳以降では、それぞれ親の世代の１歳上の体重を上回っている。



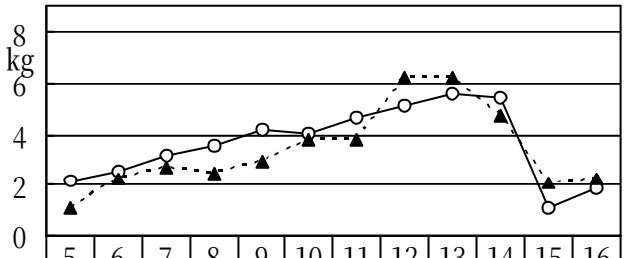


③ 年間発育量

１７歳(昭和６２年度生まれ)の各年齢における年間発育量をみると、男子では図１０のように１２歳から１４歳時の発育が著しく、１３歳時に最大の発育量(５.６kg)となり、最大の発育量となった年齢は、前年度と同じ年齢である。

女子では図１１のように、９歳から１１歳時の発育が著しく、９歳及び１１歳時に最大の発育量(４.８kg)となっている。

図10 世代・年齢別 体重の年間発育量(男子)



	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
S62年度生	2.2	2.6	3.2	3.6	4.2	4.1	4.7	5.2	5.6	5.5	1.1	1.9
S32年度生	1.1	2.3	2.7	2.5	3.0	3.8	3.8	6.3	6.3	4.8	2.1	2.3

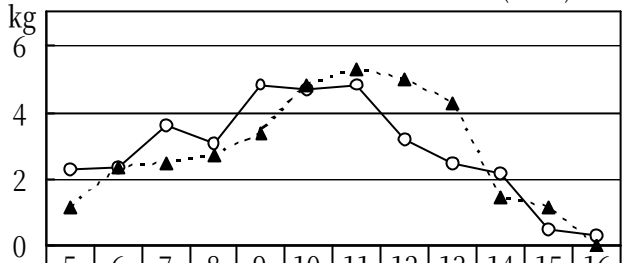
S62年度生　S32年度生

〈親の世代との比較〉

親の世代の１７歳(昭和３２年度生まれ)と比較すると、男子で発育量が最大となる時期は、１３歳時となっており、５歳から１１歳及び１４歳時では親の世代を上回っている。

女子では発育量が最大となる時期は、９歳及び 11 歳時で、５歳、７歳から９歳、１４歳及び１６歳時で親の世代を上回っている。

図11　世代･年齢別 体重の年間発育量(女子)



	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
S62年度生	2.3	2.4	3.6	3.1	4.8	4.7	4.8	3.2	2.5	2.2	0.5	0.3
S32年度生	1.1	2.4	2.5	2.7	3.4	4.8	5.3	5.0	4.3	1.4	1.1	0.0

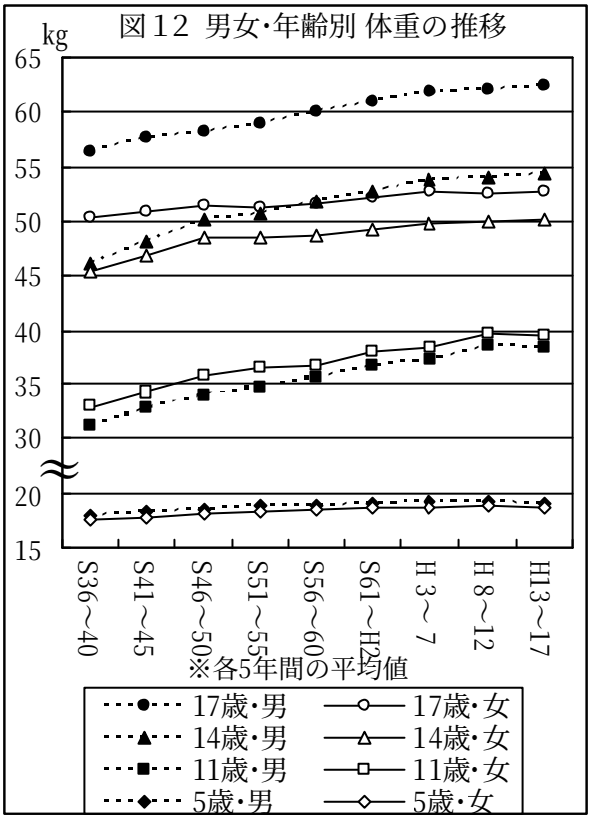
S62年度生　S32年度生

④ 過去４５年間の推移

体重の推移を、５歳(幼稚園)、１１歳(小学校)、１４歳(中学校)、１７歳(高等学校)の４つの年齢について男女別にみると、図１２のとおりである。
(注:５年間の平均値を使用。)

全体的な傾向をみると、身長の場合とは異なり、体重では５歳の男女がほぼ横ばい状態であるのを除き、他の区分では、平成１３～１７年度で、１１歳男女が８～１２年度を下回ったものの、１４歳男女及び１７歳男女は増加傾向にある。

図１２ 男女･年齢別 体重の推移



(3) 座 高

① 前年度との比較

前年度との比較は表３のとおりである。

座高を前年度の同年齢と比較すると、男子では、最も増加しているのは１１歳の０.７㎝で、最も減少しているのは、１６歳及び１７歳の０.５㎝である。

女子では、最も増加しているのは１１歳の０.２㎝で、最も減少しているのは、６歳の０.５㎝である。

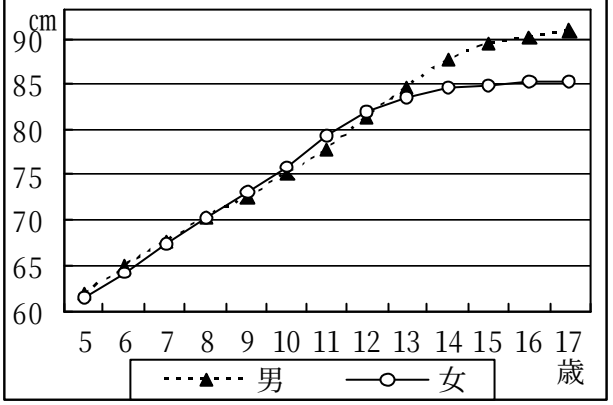
表3 男女・世代・年齢別 座高の状況 (単位:cm)

区分		男子 平成17年度 A	男子 平成16年度	男子 昭和50年度 B(親の世代)	男子 差 A−B	女子 平成17年度 A	女子 平成16年度	女子 昭和50年度 B(親の世代)	女子 差 A−B
幼稚園	5 歳	62.0	62.0	62.0	0.0	61.5	61.5	61.4	0.1
小学校	6 歳	64.9	64.8	64.4	0.5	64.2	64.7	63.8	0.4
	7	67.4	67.6	67.0	0.4	67.2	67.3	66.5	0.7
	8	70.2	70.0	69.4	0.8	70.1	70.4	69.4	0.7
	9	72.4	72.4	71.7	0.7	73.0	72.9	71.6	1.4
	10	74.9	74.9	73.7	1.2	75.9	75.8	74.7	1.2
	11	77.8	77.1	75.9	1.9	79.4	79.2	77.6	1.8
中学校	12 歳	81.4	81.2	79.1	2.3	82.0	82.1	80.9	1.1
	13	84.6	84.7	82.7	1.9	83.5	83.5	83.1	0.4
	14	87.8	87.6	85.9	1.9	84.6	84.7	84.0	0.6
高等学校	15 歳	89.5	89.7	88.4	1.1	84.9	85.3	84.5	0.4
	16	90.2	90.7	89.5	0.7	85.3	85.2	84.4	0.9
	17	90.8	91.3	90.1	0.7	85.2	85.2	84.6	0.6

② 男女の比較

年齢別に男女を比較すると、表３・図１３のように、９歳から１２歳では女子の座高が男子をやや上回っている。また、１３歳まではほとんど男女差はないが、１４歳以降は男子が女子を大きく上回るようになり、差が最大となる１７歳では男子の方が５.６㎝高くなっている。

図13 平成17年度男女・年齢別 座高の状況



〈親の世代との比較〉

親の世代と比べると、表３・図１４・図１５のように、５歳男子を除く年齢区分で親の世代を上回っている。男子では１２歳で２.３㎝と差が最大となり、１５歳で親の世代の１６歳と同じになり、さらに１６歳で親の世代の１７歳を上回っている。女子では１１歳で１.８㎝と差が最大となり、１５歳では、親の世代の１７歳の座高を上回っている。

図14 世代・年齢別 座高の状況(男子)

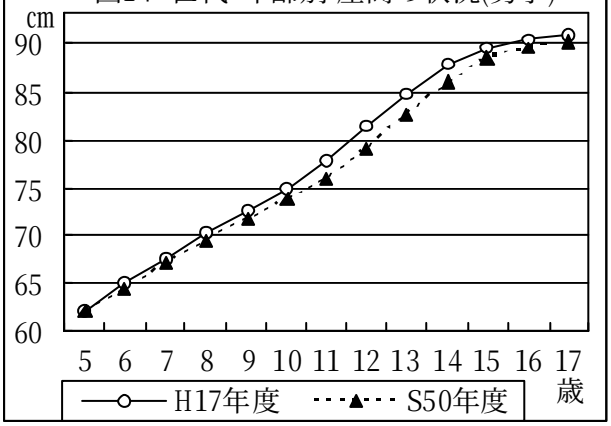
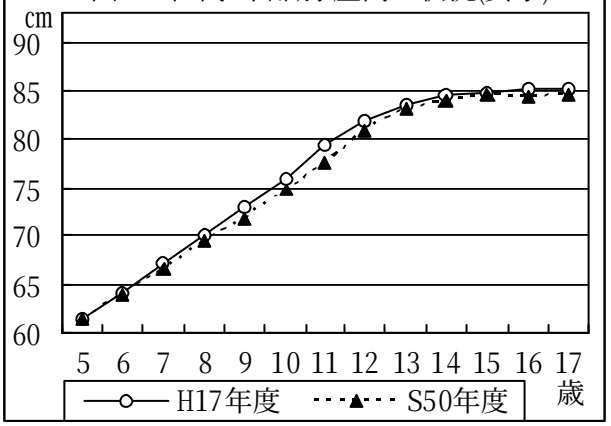


図15 世代・年齢別 座高の状況(女子)



2　健康状態調査結果

調査客体数(抽出)は全国集計で精度を満たすように設定されているが、福岡県の単年度分のみの集計結果では、各年度ごとの数値にかなりの開きが見られる場合がある。このため、精度を高めるため、疾病・異常のある者の割合の５年間の平均を使用することとした(ただし、裸眼視力については、検査実施率が低い幼稚園及び集計方法が異なる昭和５３年度以前は除く。)。以下、疾病・異常のある者の割合が調査項目中、最も高い「むし歯(う歯)」と次に高い「裸眼視力１.０未満」及び「ぜん息」と「肥満傾向」について記述する。

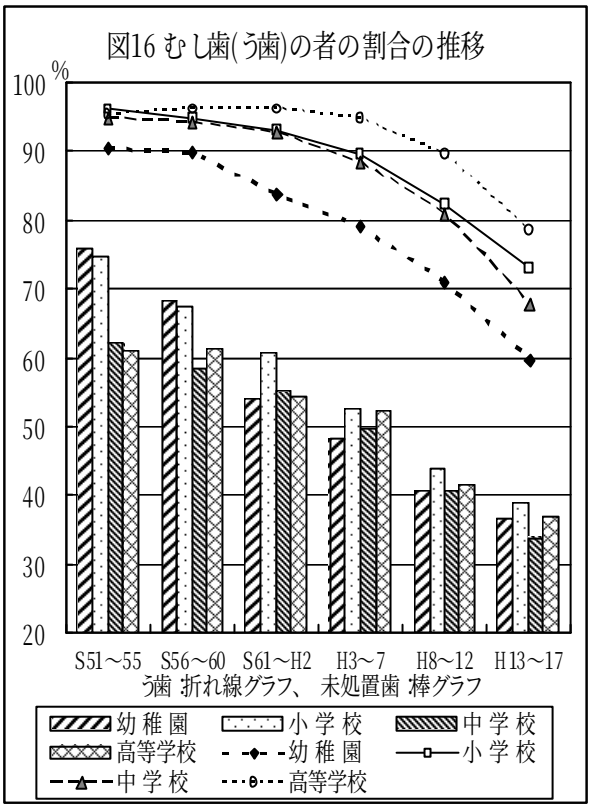
(1)むし歯(う歯)

① 過去３０年間の推移

平成１３～１７年度のむし歯の者の割合(治療済みの歯がある者(以下、処置完了者という。)を含む。)は、幼稚園５９.７%、小学校７２.８%、中学校６７.９%、高等学校７８.４%と、全調査項目中で最も高率となっている。

過去３０年間の推移をみると、図１６・表４のように、幼稚園・小学校・中学校では、昭和５１～５５年度以降一貫して低下している。高等学校では、昭和５６～６０年度にいったん上昇したが、以降低下している。

また、昭和５１～５５年度からの低下幅を各学校種別にみると、幼稚園で３０.６ポイント、小学校で２３.３ポイント、中学校で２６.７ポイント、高等学校で１６.７ポイントとなっており、幼稚園で特に低下幅が大きくなっている。平成８～１２年度からの低下幅は、幼稚園１１.１ポイント、小学校で９.４ポイント、中学校で１２.８ポイント、高等学校で１１.２ポイントと全学校種別で最大となっている。



未処置歯(治療が必要であるにもかかわらず治療を行っていないむし歯)のある者の割合も、昭和５６～６０年度を境に、全学校種別で低下してきており、特に低下が著しい幼稚園では、昭和５１～５５年度の７５.９%に比べ、平成１３～１７年度では半分以下の３６.８%に減少している。

また、処置完了者(むし歯の者から未処置歯のある者を差し引いた)の割合は、幼稚園・小学校では未処置歯のある者の割合を下回っているが、中学校・高等学校では上回っている。

表４　むし歯(う歯)の者の割合の推移　(単位：%)

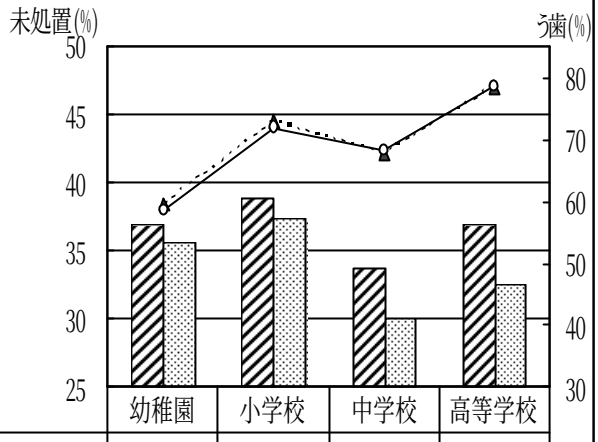
区分		S51～55	S56～60	S61～H2	H 3～ 7	H 8～12	H13～17
幼稚園	むし歯(う歯)の者	90.3	89.8	83.6	79.2	70.8	59.7
	未処置歯のある者	75.9	68.3	54.0	48.2	40.6	36.8
	処置完了者	14.4	21.4	29.6	31.0	30.2	22.9
小学校	むし歯(う歯)の者	96.1	94.6	92.9	89.5	82.2	72.8
	未処置歯のある者	74.8	67.5	60.7	52.6	44.0	38.9
	処置完了者	21.4	27.1	32.2	37.0	38.2	33.9
中学校	むし歯(う歯)の者	94.6	94.0	92.6	88.4	80.7	67.9
	未処置歯のある者	62.0	58.5	55.1	49.8	40.6	33.8
	処置完了者	32.6	35.5	37.5	38.7	40.2	34.1
高等学校	むし歯(う歯)の者	95.1	96.0	96.0	94.5	89.6	78.4
	未処置歯のある者	61.0	61.4	54.6	52.2	41.6	36.9
	処置完了者	34.1	34.6	41.3	42.4	48.0	41.6

② 全国との比較

平成１３～１７年度のむし歯の者の割合を全国と比較したところ、図１７のように、幼稚園、小学校で全国を上回っている(幼稚園で１.１ポイント、小学校で０.９ポイント)。

未処置歯のある者の割合は、全学校種別で全国を上回っている(幼稚園で１.１ポイント、小学校で１.６ポイント、中学校で３.８ポイント、高等学校で４.４ポイント)。

図17 むし歯(う歯)の者の割合(全国比較)



	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
未処置(県)	36.8	38.9	33.8	36.9
未処置(全国)	35.7	37.3	30.0	32.5
う歯 (県)	59.7	72.8	67.9	78.4
う歯(全国)	58.6	71.9	68.0	78.5

う歯 :折れ線ｸﾞﾗﾌ、未処置歯 :棒ｸﾞﾗﾌ

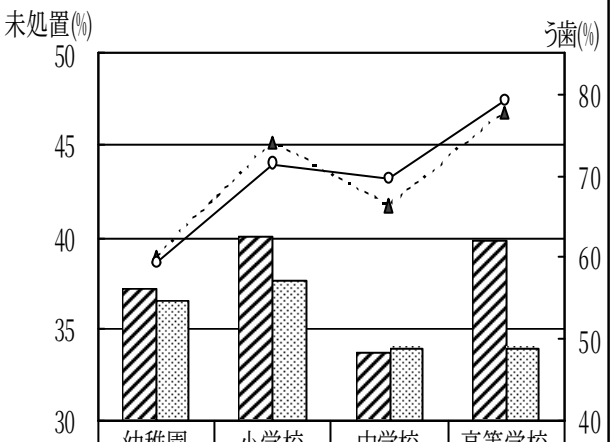
未処置(県)　未処置(全国)
う歯 (県)　う歯(全国)

③ 男女の比較

男女別にみると、図１８のように、むし歯の者の割合は、小学校までは男子が女子を上回っている(幼稚園０.８ポイント、小学校２.７ポイント)が、中学校以降は逆に女子が男子を上回っている(中学校３.４ポイント、高等学校１.６ポイント)。

未処置歯のある者の割合は、中学校を除く学校種別で男子が女子を上回っている(幼稚園０.７ポイント、小学校２.５ポイント、高等学校５.９ポイント)。

図18 むし歯(う歯)の者の割合(男女比較)



	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
未処置(男)	37.2	40.1	33.7	39.8
未処置(女)	36.5	37.6	33.9	33.9
う歯 (男)	60.1	74.1	66.2	77.7
う歯 (女)	59.3	71.4	69.6	79.3

う歯 :折れ線ｸﾞﾗﾌ、未処置歯 :棒ｸﾞﾗﾌ

未処置(男)　未処置(女)
う歯 (男)　う歯 (女)

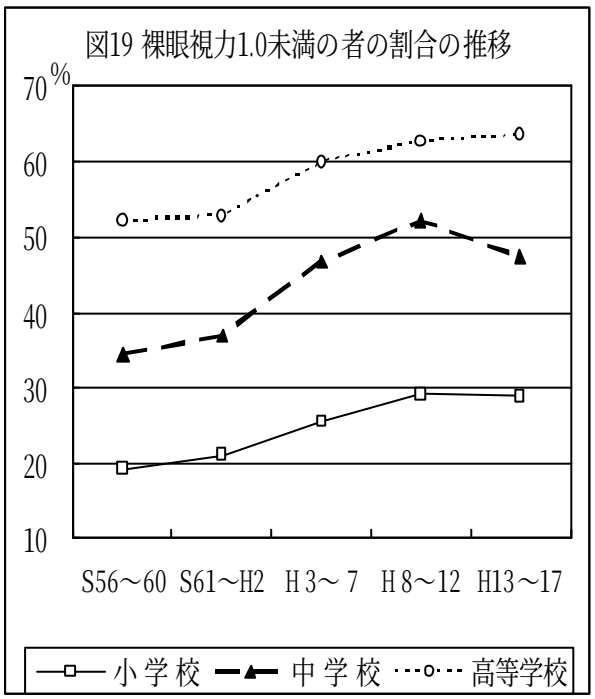
(2)裸眼視力１.０未満

① 過去２５年間の推移

平成１３～１７年度の裸眼視力１.０未満の者の割合は、小学校２８.８％、中学校４７.３％、高等学校６３.４％であり、調査項目中、むし歯(う歯)に次いで２番目の高率となっている。

過去２５年間の推移をみると、図１９・表５のように、小学校・中学校では、昭和５６～６０年度以降上昇していたが、平成１３～１７年度では平成８～１２年度に比べ、小学校で０.２ポイント、中学校で４.８ポイント低下した。しかし、高等学校では、昭和５６～６０年度以降一貫して上昇しており、昭和５６～６０年度に比べ、平成１３～１７年度では１１.３ポイント上昇している。

また、裸眼視力１.０未満の者の中で特に視力が弱い裸眼視力０.３未満の者の割合をみると、図２０のように、裸眼視力１.０未満の者と同様、小学校・中学校ともに、昭和５６～６０年度以降上昇していたが、平成１３～１７年度では前年度区分に比べ、小学校で０.６ポイント、中学校で２.９ポイント低下した。高等学校では、昭和５６～６０年度以降一貫して上昇しており、昭和５６～６０年度に比べ、平成１３～１７年度では９.７ポイント上昇している。



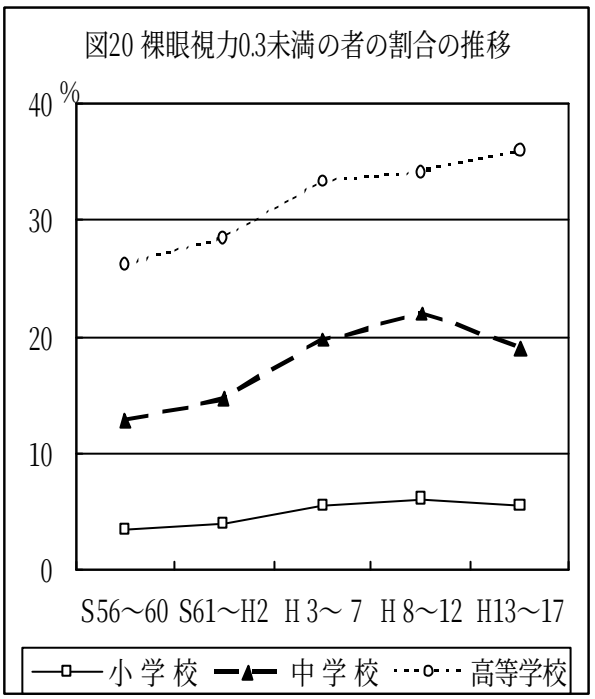


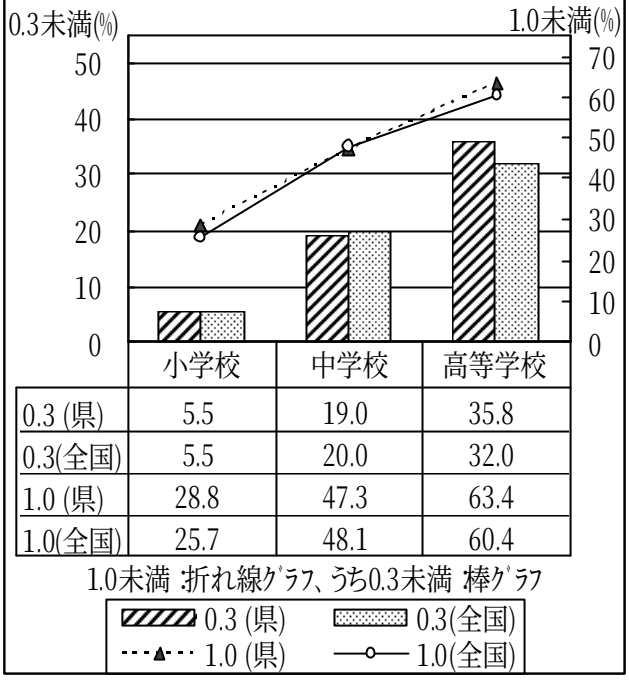
表５　裸眼視力１.０未満の者の割合の推移　(単位：%)

区分		S56～60	S61～H 2	H 3～ 7	H 8～12	H13～17
小学校	裸眼視力1.0未満	19.2	21.1	25.4	29.0	28.8
	1.0未満0.7以上	9.8	10.4	11.1	12.5	13.0
	0.7未満0.3以上	6.2	6.9	9.0	10.4	10.2
	0.3未満	3.3	3.9	5.4	6.1	5.5
中学校	裸眼視力1.0未満	34.6	36.9	46.6	52.1	47.3
	1.0未満0.7以上	9.9	9.9	10.7	13.0	11.1
	0.7未満0.3以上	12.0	12.5	16.1	17.2	17.2
	0.3未満	12.7	14.6	19.8	21.9	19.0
高等学校	裸眼視力1.0未満	52.1	52.8	60.0	62.6	63.4
	1.0未満0.7以上	10.7	9.9	10.6	12.0	10.3
	0.7未満0.3以上	15.3	14.6	16.2	16.8	17.3
	0.3未満	26.1	28.3	33.2	33.9	35.8

② 全国との比較

平成１３～１７年度の裸眼視力１.０未満の者の割合を全国と比較したところ、図２１のように、小学校と高等学校で全国を上回って(小学校で３.１ポイント、高等学校で３.０ポイント)、中学校では全国を下回っている(０.８ポイント)。また、裸眼視力０.３未満の者は、高等学校で全国を上回って(高等学校で３.８ポイント)、中学校では全国を下回っている(１.０ポイント)。

図21 裸眼視力1.0未満の者の割合(全国比較)

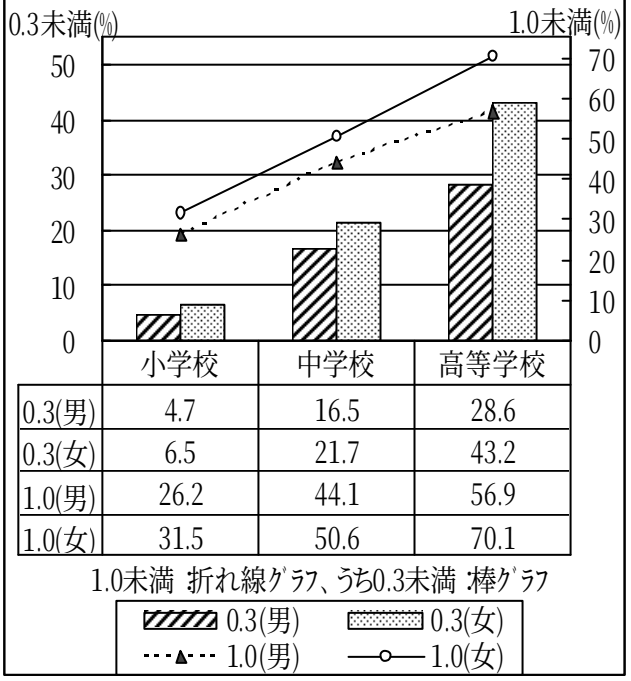


③ 男女の比較

平成１３～１７年度の裸眼視力１.０未満の者の割合を男女別にみると、図２２のように、全学校種別で女子が男子を上回っており(小学校で５.３ポイント、中学校で６.５ポイント、高等学校で１３.２ポイント)、女子と男子の差は、進学するに伴い、拡大していく傾向にある。

裸眼視力０.３未満の者の割合も同様に、全学校種別とも女子が男子を上回っており(小学校で１.８ポイント、中学校で５.２ポイント、高等学校で１４.６ポイント)、女子と男子の差は、進学するに伴い、拡大していく傾向にある。

図22 裸眼視力1.0未満の者の割合(男女比較)



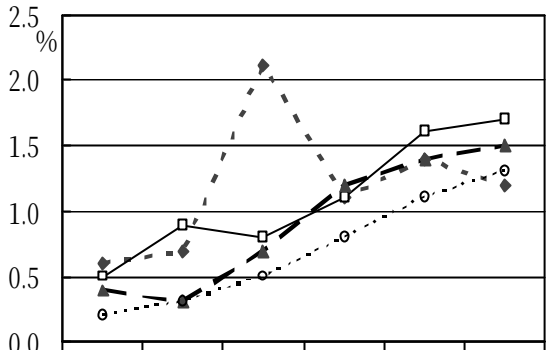
(３)ぜん息

① 過去３０年間の推移

平成１３～１７年度のぜん息の者の割合は、幼稚園１.２%、小学校１.７%、中学校１.５%、高等学校１.３%となっている。

過去３０年間の推移をみると、図２３のように、幼稚園では、平成３～７年度にいったん低下し、平成８～１２年度には上昇したが、平成１３～１７年度では再び低下し、平成８～１２年度に比べ、０.２ポイント低下している。小学校では、昭和５１～５５年度より上昇傾向にあり、平成１３～１７年度は最も低率であった昭和５１～５５年度に比べ、１.２ポイント上昇している。中学校では、上昇傾向にあり、最も低率であった昭和５６～６０年度に比べ、１.２ポイント上昇している。高等学校では、昭和５１～５５年度以降上昇傾向にあり、平成１３～１７年度は最も低率であった昭和５１～５５年度に比べ、１.１ポイント上昇している。

図23 ぜん息の者の割合の推移



	S51～55	S56～60	S61～H2	H３～7	H８～12	H13～17
幼稚園	0.6	0.7	2.1	1.1	1.4	1.2
小学校	0.5	0.9	0.8	1.1	1.6	1.7
中学校	0.4	0.3	0.7	1.2	1.4	1.5
高等学校	0.2	0.3	0.5	0.8	1.1	1.3

幼稚園　小学校　中学校　高等学校

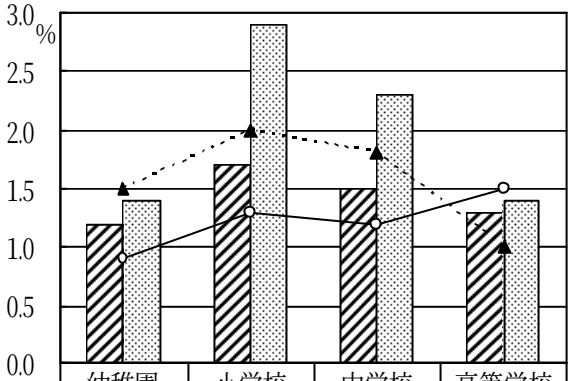
② 全国との比較

平成１３～１７年度のぜん息の者の割合を全国と比較したところ、図２４の棒グラフのように、全学校種別で全国を下回っている(幼稚園０.２ポイント、小学校１.２ポイント、中学校０.８ポイント、高等学校で０.１ポイント)。

③ 男女の比較

男女別にみると、図２４の折れ線グラフのように、幼稚園、小学校、中学校では男子が女子を上回っており(幼稚園０.６ポイント、小学校０.７ポイント、中学校で０.６ポイント)、高等学校では逆に女子が男子を上回っている(０.５ポイント)。

図24 ぜん息の者の割合(全国・男女比較)



	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
県	1.2	1.7	1.5	1.3
全国	1.4	2.9	2.3	1.4
県・男	1.5	2.0	1.8	1.0
県・女	0.9	1.3	1.2	1.5

県・全国 棒ｸﾞﾗﾌ、男・女 折れ線ｸﾞﾗﾌ

県　全国　県・男　県・女

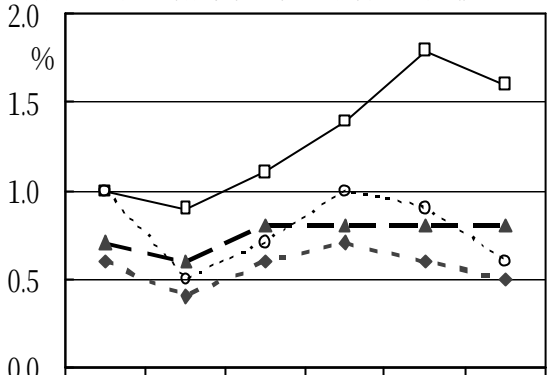
(４)肥満傾向

① 過去３０年間の推移

平成１３～１７年度の肥満傾向の者(学校医から肥満傾向と判定された者)の割合は、幼稚園０.５％、小学校１.６％、中学校０.８％、高等学校０.６％となっている。

過去３０年間の推移をみると、図２５のように、幼稚園では、昭和５６～６０年度にいったん低下し、その後上昇傾向にあったが、平成３～７年度を境に再び低下傾向にあり、平成１３～１７年度は平成８～１２年度に比べ、０.１ポイント低下した。小学校では、昭和５６～６０年度いったん低下し、その後は上昇傾向にあったが、平成１３～１７年度は平成８～１２年度に比べ、０.２ポイント低下した。中学校では、昭和５６～６０年度にいったん低下していたが、その後上昇し、昭和６１～平成２年度以降は横ばいとなっている。高等学校では、昭和５６～６０年度にいったん低下し、その後上昇傾向にあったが、平成３～７年度を境に再び低下傾向にあり、平成１３～１７年度は、平成８～１２年度に比べ、０.３ポイント低下した。

図25 肥満傾向の者の割合の推移



	S51～55	S56～60	S61～H2	H３～7	H８～12	H13～17
幼稚園	0.6	0.4	0.6	0.7	0.6	0.5
小学校	1.0	0.9	1.1	1.4	1.8	1.6
中学校	0.7	0.6	0.8	0.8	0.8	0.8
高等学校	1.0	0.5	0.7	1.0	0.9	0.6

幼稚園　小学校　中学校　高等学校

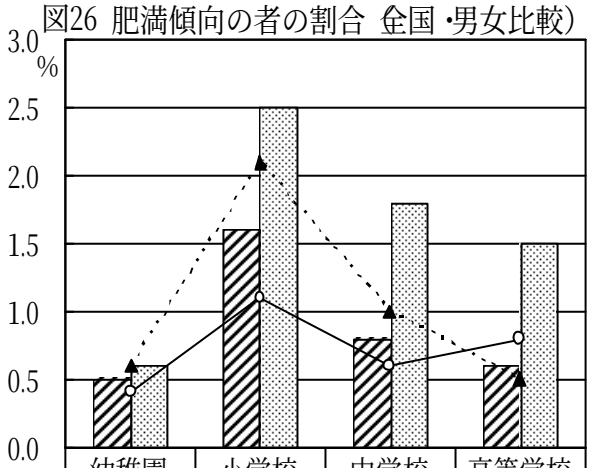
② 全国との比較

平成１３～１７年度の肥満傾向の者の割合を全国と比較したところ、図２６の棒グラフのように、全学校種別で全国を下回っている(幼稚園０.１ポイント、小学校０.９ポイント、中学校１.０ポイント、高等学校０.９ポイント)。

③ 男女の比較

男女別にみると、図２６の折れ線グラフのように、幼稚園、小学校、中学校では男子が女子を上回り(幼稚園０.２ポイント、小学校１.０ポイント、中学校では０.４ポイント)、逆に、高等学校では女子が男子を上回っている(０.３ポイント)。

図26 肥満傾向の者の割合（全国・男女比較）



	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
県	0.5	1.6	0.8	0.6
全国	0.6	2.5	1.8	1.5
県・男	0.6	2.1	1.0	0.5
県・女	0.4	1.1	0.6	0.8

県・全国 棒ｸﾞﾗﾌ、男・女 折れ線ｸﾞﾗﾌ

県　全国　県・男　県・女